庭園 協会ニュース 第108号

一般社団法人 日本庭園協会

東京都新宿区西早稲田1-6-3 フェリオ西早稲田301号
〒169-0051　TEL:03-3204-0595（FAX兼用）
E-mail:gsj20@m7.dion.ne.jp　URL:http://nitteikyou.org/

発行者：会長　高橋康夫
編集者：広報委員長　小沼康子
題　字：上原敬二
発行日：2022（令和4）年4月15日

小田原フラワーガーデン「渓流の梅林」　四季を通して観賞できるよう流れと梅林を一体化させた景観　2020年3月　筆者撮影

私のライフワークとターニングポイント

榊原 八朗

1944年生まれ、静岡県出身。1967年、東京農業大学造園学科卒業。1967年～1972年、東京庭苑株式会社にて小形研三先生に師事。1972年～1974年、米国オレゴン州ポートランド日本庭園に従事。1975年、米国クリスインターナショナルにて研修。1976年、独立。2004年～2014年、明星大学デザイン学部教授。2014年からランドスケープデザイン塾主催、現在に至る。座右の銘：「生涯学習」、美的構成要素を自然から学びデザインの客観性を追い求める。尊敬する人：生涯の師は小形研三。

「飯田十基先生は仕事の一貫として、灯籠や石像物をライフワークとしていたが、君もなんでもいいから趣味を持ち生涯打ち込めるものを探したらいい」これは、1987年の夏、師匠、故小形研三先生とオーストラリアに同行させていただいた折、機内で頂戴した言葉である。

1988年の日本経済は好景気の絶頂期、私も造園設計監理で海外も含め東奔西走の多忙さであった。しかし、その景気も長くは続かず、3年後にバブル景気は崩壊した。同時に仕事の依頼も底をつき、体を持て余す日々が続いた。気の紛らしに事務所内の片付けを始めたところ、部屋の隅に段ボール箱を見つけた。1975年、米国から帰国の際に送ったもので、その中にアルバムと住居やガーデンなどの雑誌に紛れていたノートがあった。これは1972年、米国オレゴン州ポートランドの日本庭園の管理に従事していた折に石組や植栽の表現手法を描き留めていたもの。このノートを見た時、天にも昇る心地で「これだ」と叫びたくなるような心境であった。

早速、20数年培ってきた技術とデザインのノウハウを具体化し、立体感覚とイメージ力を高めることを目的としたテキストの作成に取りかかった。最初に「植栽のデザイン」をテーマとして60数ページを描き上げた。この一冊を手始めに「ランドスケープデザイン塾」を立ち上げた。友人たちの力添えで20数人の受講者が集まり、講座の後は居酒屋での造園談義で終了。剛と柔のバランスを兼ね備えた塾となった。毎月4回で1巻終了。一月ごとに2巻「石組と築山のデザイン」、3巻「滝組のデザイン」、4巻「池と流れのデザイン」を描き上げ、5巻目の「飛び石と園路のデザイン」編でつまずいた。飛び石の打ち方において「何故、どうして」に対しての客観的な答えが見つからなかったからだ。しばらくたって螺旋階段がヒントになり、2ヶ月遅れのテキストとなった。次に「蹲踞のデザイン」、そして「トータルデザイン」の7巻を最後に9ヶ月で全巻を描き上げた。自然の形態と美的要素の本質を探り、それを具体的に表現し理論化することを目的として「デザインの源泉は自然にあり」を私のライフワークとして日々追求している。そして、バブルの崩壊は私にとってのターニングポイントになった。

令和４年度　一般社団法人

日本庭園協会定期総会

令和４年３月11日　オンライン会議

一般社団法人日本庭園協会は、２０２２（令和４）年３月11日（金）午後１時30分よりオンラインで総会を開催した。

新型コロナウイルス感染症の影響が収まらない中、昨年に引き続き、評議員会の開催は見送ることとし、総会は対面とはいかないまでも出席者の顔が見える方式であるオンラインとした。

【総会】午後１時30分

司会＝廣瀬慶寛技術委員長

正会員５３４名中出席者２７５名（内委任状出席２３３名）で、定款十九条により成立。菊地正樹副会長の開会の辞、高橋康夫会長の挨拶の後、会長が議長となり、議事録作成者に小沼康子常務理事、議事録署名人に清水哲也理事、桃井雅彦北海道南支部長を指名し議事に入る。

○第一号議案「令和３年度事業報告の件」

現況報告＝加藤精一総務委員長

本部事業報告＝加藤総務委員長

廣瀬技術委員長

小沼康子広報委員長

支部事業報告＝廣瀬技術委員長

１　現況（令和２年12月31日現在）

⑴事務所…〒１６９-００５１

東京都新宿区西早稲田１-６-３

フェリオ西早稲田３０１号

電話…０３（３２０４）０５９５

E-mail　gsj20@m7.dion.ne.jp

URL　http://nitteikyou.org/

⑵会員数（カッコ内の数字は前年比）

正会員５２１名（10減）

特別会員／名誉会長・会員13名（２増）

維持会員10社（１減）

学生会員２名（増減無し）

総会員数５４６名（９減）

⑶本部委員会および特別委員会、支部組織（カッコ内は委員長）

①本部委員会／総務委員会（加藤精一）財務委員会（加藤新一郎）技術委員会（廣瀬慶寛）鑑賞研究委員会（高橋康夫）広報委員会（小沼康子）国際活動委員会（三橋一夫・２０２１年５月27日逝去・以降代理高橋康夫）

②特別委員会／文化財指定庭園調査委員会（高橋康夫）日本庭園協会賞選考委員会（高橋康夫）日本庭園協会賞選考規程検討委員会（高橋良仁）日本庭園協会設立百周年記念事業委員会（高橋康夫）

③支部（カッコ内は支部長）／北海道南支部（桃井雅彦）宮城県支部（竹田利光）栃木県支部（清水一樹）茨城県支部（飛田幸男）埼玉県支部（山田祐司）千葉県支部（岩崎隆）東京都支部（鈴木康幸）神奈川県支部（米山拓未）新潟県支部（小林紀昭）石川県支部（宮本広之）静岡県支部（伊久美和秀）愛知県支部（高見紀雄）近畿支部（山田拓広）岡山県支部（三宅秀俊）広島県支部（藤原忍）鳥取県支部（石亀靖）島根県支部（仲佐修二）山口県支部（殿井正敏）四国支部（米谷進吾）

２　事業の概要

【本部事業】

⑴**総務事業**　①第８回全国支部長連絡協議会 本部主催・ｚｏｏｍによるオンライン会議開催（２・20）②（一社）日本庭園協会定期総会（３・12）③常務理事会（３・５）（４・20）（５・18）（６・15）（７・20）（８・17）（９・12）（10・26）（12・７）④理事会（３・５）（10・26）

⑵**広報事業**　①庭園協会ニュースの発行（１０３～１０６号）／創立百周年記念事業・清澄庭園再評価プロジェクト「清澄庭園を国指定名勝にする」連続講演会全６回を掲載②ＧＳＪニュース（はがき）の発行（第77号）

⑶**鑑賞研究事業**　新型コロナウイルスの感染拡大に十分配慮し会員の安全を第一として事業を実施する方針にもとづき、緊急事態宣言の発令、まん延防止等重点措置の実施など感染拡大防止対策をふまえ、講演会および技術委員会と連携した鑑賞会・一般市民向けの鑑賞会を中止とした。

⑷**技術事業**　①伝統庭園技塾／宮城県支部と共催（中止）②庭園技術連続基礎講座／「煎茶精神と庭～そのかかわりをさぐる」加藤精一総務委員長（10・31）、「都立庭園の冬支度の意匠」北村葉子氏（公財）東京都公園協会文化財庭園課文化財庭園係長（11・28）③みんなの緑学／「現代日本庭園の巨匠たち・斉藤勝雄」和田新也氏 箱根植木（株）代

表取締役社長、龍居竹之介名誉会長（11・13）④日本造園アカデミー会議主催「造園シンポジウム」テーマ「災い転じて希望となす造園力」高橋康夫会長、横山英悦氏宮城県支部会員（9・11、12）

⑸**国際活動事業**　国土交通省「海外日本庭園再生プロジェクト」ロシア科学アカデミー中央植物園日本庭園（以降、モスクワ日本庭園）の修復事業についてはパンデミックが収束しない状況により海外派遣を取りやめ、オンライン及び修復計画書（令和2年度作成：日本語）のロシア語に翻訳することとした。

また、ロシア科学アカデミーV・L・コマロフ記念植物研究所ピョートル大帝植物園主催の国際学術会議「日本庭園～植物学、意味、景観」が2021年5月31日から4日間にわたりオンライン開催され、国際活動委員の細野達哉氏が「中島健の日本庭園デザインの特徴」と題し、国土交通省委託の「令和2年度海外日本庭園再生プロジェクトモスクワ日本庭園の修復計画」において同庭園の作庭者中島健氏について調査収集した内容から、氏の造園観や作風について分析した成果を発表した。

令和2年度海外日本庭園再生プロジェクト・モスクワ日本庭園の修復計画（3・20）／ロシア科学アカデミーV・L・コマロフ記念植物研究所ピョートル大帝植物園主催の国際学術会議「日本庭園～植物学、意味、景観」において国際活動委員細野達哉氏が「モスクワ日本庭園の修復計画」において同庭園の作庭者である中島健氏の造園観や作風について分析した成果を発表（5・31）／昨年度の修復計画書のロシア語翻訳業務、及び計画内容説明業務を契約（9・30）／モスクワ日本庭園側の担当者が変わったため、初顔合わせとなるzoomミーティングを実施（10・19）／都市緑化機構へ修復計画書（ロシア語版）の印刷簡易製本提出（12・16）

【支部事業】

◆北海道南支部

⑴**会議の開催**　支部総会（1月）、懇親会（中止）

⑵**技術事業**　講習会等は中止

◆宮城県支部

⑴**技術事業**　①東日本大震災復興記念庭園管理作業・トヨタ自動車東日本、宮床老人会参加（4～11月・毎月第1土曜日）②日本造園アカデミー会議造園シンポジウム参加（9・11～12）③ミニ講座／「グリホサートの危険性」鎌田勉氏（9・26）④ミニ講座／「セメントについて」庄司晋氏（10・29）⑤ミニ講座・ミニ講座企画提案会議（11・27）

◆栃木県支部

コロナ禍のため事業中止

◆茨城県支部

⑴**会議の開催**　第8回全国支部長連絡協議会出席（飛田）（2・20）

⑵**技術事業**　①チェーンブロック講習会（笠間市）茨城県造園技能士会協賛（10・9～10）②本部技術委員会（日比谷公園）龍居名誉会長による講習会出席（飛田）（11・13）

◆埼玉県支部

⑴**会議の開催**　役員会（10・21）（12・22）

⑵**技術事業**　芸術祭出品作品片付け・JAさいたま大宮緑花木センター（3・27）

◆千葉県支部

⑴**会議の開催**

⑵**技術事業**　①庭園見学会・会員作品の見学（7～8月）②モルタル造形実技講習会（8～9月）③山河を愛でる会（中止）

◆東京都支部

⑴**会議の開催**　役員会議（4月、5月、7月、9月、11月）

⑵**技術事業**　韮崎大村美術館庭園工事見学（10月）

◆神奈川県支部

⑴**会議の開催**　①支部総会・緊急事態宣言発令により中止②役員会（11・13）

⑵**技術事業**　①瓦土塀50m　土塀腰積み講習会（4・28～30）②瓦粘土積み上げ／長田幸司氏（5・23）（5・30）③瓦粘土積み～屋根下地（6・6）（6・26～27）④屋根瓦ふき（7・4）⑤土塀屋根反り部下げ縄による土塗り講習会（10・17）（10・24）

◆新潟県支部

⑴**会議の開催**　①支部総会（書面開催）（2・25）②役員会（1・29）（6・18）（9・2）（11・11）（12・18）②忘年会（12・18）

⑵**技術事業**　①『備忘録　田中泰阿弥　第二章』発刊（2・2）『備忘録　田中泰阿弥　第三章』発刊（4・6）『備忘録　田中泰阿弥　第四章』発刊（6・8）『備忘録　田中泰阿弥　第五章』発刊（8・6）②支部主催伝統庭園技塾（新発田五十公野公園石泉荘）・石泉荘の庭園の鑑賞とアカマツ剪定（6・8～9）③支部主催伝統庭園技塾（貞観園）・低木剪定（6・29）④支部主催伝統庭園技塾（貞観園）・低木剪定（10・5）

◆**石川県支部**
⑴会議の開催　①支部総会（コロナ禍のため対面中止、FAXにて議案承認）②役員会（3・22）（4・12）（5・25）
⑵技術事業　①竹垣、燈籠コモ掛け、縄細工、ロープワーク講習会を予定していたがコロナ禍のため中止
◆**静岡県支部**
⑴会議の開催
⑵技術事業　①編笠門作製講習会（毎月1回日曜日）②石積み・日干しレンガ土塀講習会（臥雲寺）（概ね月1回）③天空の坪庭展（4月）
◆**愛知県支部**
⑴会議の開催　①支部総会中止（2月）②オンラインリモート会議中止（4月）
⑵技術事業　①「あいち花マルシェガーデンショウ」にて「ガーデントークショウ」「落葉アート」参加（名古屋市・久屋大通庭園フラリエ）（11月）
◆**近畿支部**
コロナ禍のため事業中止
◆**岡山県支部**
⑴会議の開催
⑵技術事業　①見学会・岡山後楽園永昌橋架け替え工事（1・19）
◆**広島県支部**
⑴会議の開催　支部総会（3・1）
◆**鳥取県支部**
⑴会議の開催　①支部総会（1・23）
⑵技術事業　②ツリークライミング講習会（4・24）
◆**島根県支部**
⑴会議の開催　①支部総会　リモート会議（2・16）②全国支部長連絡協議会出席（リモート会議）（2・20）
⑵技術事業　①庭手入れ（安来市・安松軒）（11・13）②石割講習会（安来市・田辺石材）（11・20）
◆**山口県支部**
コロナ禍のため事業中止
◆**四国支部**
⑴会議の開催　①書面による支部総会（5月）②役員会（4・25）
⑵技術事業　①光波測量講習会準備（12・6）

○第二号議案「令和3年度収支決算、会計監査報告の件」
決算報告＝加藤財務委員長
監査報告＝野村脩監事
収支決算報告および会計監査報告（7頁参照）が説明された。

○第三号議案「令和4年度事業計画」
組織方針＝加藤総務委員長
本部事業説明＝加藤総務委員長
支部事業説明＝廣瀬技術委員長

令和4年度事業計画の概要
◆日本庭園協会組織方針
一昨年の1月16日、日本で最初の新型コロナウイルス感染者第1号が確認されたが、この新型コロナウイルスは世界的な感染拡大になった。その後、収束する状況になく、昨年は何度かの緊急事態宣言が出され、やはり総会をはじめとする各事業の縮小もしくは中止を余儀なくされた。当協会は「会員一人でも新型コロナウイルス感染症に罹らない」という大命題の下で決断したものであり、会員の皆様にこの決断に対してご理解を賜ったことに対して感謝申し上げたい。
今年度も現在、オミクロン株が急激に拡大しており「まん延防止等重点措置」が主要都市で適用されており、予断を許さない状況である。ついては今年度も「会員一人でも新型コロナウイルス感染症に罹らない」を大命題としたい。
また、新型コロナウイルスの感染拡大は先行き不透明であり、企画した事業については、極力実施することとするが、感染拡大の状況に応じて臨機応変に事業展開を図る。

1　世代交代を目指す
時代の変化が激しい中、若手の登用を積極的に推進し、その感性により、時代に適合した日本庭園協会の運営を目指す。

2　オンライン活用
新型コロナウイルスの感染拡大に歯止めがかからない状況であり、今年度も対面方式による事業展開がむずかしいことが予測されるので、オンラインを積極的に活用し、事業の推進を図る。

3　公園誕生150年及び日本庭園協会創立105周年
2023年は公園誕生150年であり、また、日本庭園協会創立105年となる。そこで、記念すべき周年を踏まえて様々な団体との連携を視野に周年事業についての準備委員会を立ち上げることとする。

4　様々な事業展開
地球温暖化、生物多様性保全、SDGsという社会的課題を踏まえて「見える化」を図りながら積極的に各事業を展開する。
○龍居竹之介名誉会長の連続講演会の開催
○庭園技術の向上及び伝統庭園技術の保存を図る
○庭園ニュース、ホームページなどにより最新情報を速やかに伝える
○市民に開かれた鑑賞会の実施
○国及びポートランド日本庭園など

と連携し、庭園技術を世界に伝える

5　地域に根差した独自の支部活動を展開する

支部設立の目的は、当協会の事業展開を全国的な広がりとするために、それぞれの地域が独自の活動を行うことによって、庭園文化をさらに発展させるというものである。そこで、全国支部長連絡協議会を支部と本部の交流の場と位置づけ、より緊密な事業展開を進める。特にコロナ禍にあって各支部との交流や鑑賞会の実施が難しい状況なので、各支部はそれぞれ独自の活動を行い、個性豊かな事業展開を図り、本部と一体となって地域に根差した活動を展開することとする。なお、全国展開を図るために唯一支部がない九州支部の設立を目指す。

【本部事業】

⑴総務事業

①会議の開催　定期総会　3月開催／理事会　全2回春・秋期開催／常務理事会　毎月1回程度開催。以降、随時開催

②各委員会の若手起用を積極的に行い、当協会組織の活性化を目指す③日本庭園協会のホームページ拡充を図る

④コロナ禍の中でも、活動ができるよう模索する

⑤公園誕生150年&日本庭園協会創立105周年記念事業実行準備委員会を立ち上げる

⑥龍居竹之介名誉会長ロングラン講演会を実施する

⑵広報事業

①庭園協会ニュース年4回発行（1月、4月、7月、10月）（107～110号）

②GSJニュースの発行（全会員へのはがき通信）、本部及び支部共催の事業計画に従い随時発行予定

③（一社）日本庭園協会の案内パンフレットの作成

⑶鑑賞研究事業

新型コロナウイルスの感染拡大に十分配慮して安全を第一として事業を実施する

①一般市民に向けた鑑賞会を実施する（年2回程度）

②技術委員会と連携した鑑賞会を実施する（秋季）

③宿泊を伴う鑑賞会は見送る

④タイムリーな話題をテーマにした講演会を実施する（秋季）

⑷技術事業

①伝統庭園技塾／宮城県支部と共催「高木枝打ち剪定講習会」

②連続基礎講座／5月より毎月最終日曜日5回開催予定　zoom講座

③みんなの緑学／「現代日本庭園の巨匠たち3」講座・飯田十基先生（5・13）「現代日本庭園の巨匠たち4」講座・小形研三先生（後期）

④共催講座・見学会／各支部と本部の共催講座・見学会

⑸国際活動委員会

新型コロナウイルスのパンデミックの収束を見極めながら活動を行う。

①北米日本庭園協会（NAJGA）と連携し、日本庭園の海外普及啓発に努める

②ポートランド日本庭園と連携し、技術等協力を行う

③欧州日本庭園ネットワーク設立に向け協力を行う

④海外日本庭園再生プロジェクトの一環であるロシア科学アカデミー中央植物園日本庭園（以降、モスクワ日本庭園）修復プロジェクトの事業計画は前年度で終了したが、今後もモスクワ日本庭園関係者と連携を図り、さらなる庭園の修復に協力する

⑤海外で活躍された日本の造園家の研究

モスクワ日本庭園修復プロジェクト事業はひと段落ついたが、このプロジェクトを将来的に継続させるためにも中島健先生の研究を行い、海外庭園の文化財としての庭園保護に努める。

【支部事業】

◆北海道南支部

⑴会議の開催

⑵技術事業　①講習会　2～3年の期間で一つの作品をつくる　場所や作品の詳細は検討中②見学会　金沢、京都等　予定あり

◆宮城県支部

⑴会議の開催　①役員会（12月）

⑵技術事業　①東日本大震災復興記念庭園管理作業（ボランティアの受け入れ）（3～11月・毎月）②ミニ講座（1～11月・毎月28日）③仙台フォーラスにて支部会員の作品展支部の情報発信基地とする（3月未定）④伝統庭園技塾「高木枝打ち剪定講習会」の開催については、今後の社会状況など本部の判断による

◆栃木県支部

⑴会議の開催　①支部総会の開催

⑵技術事業　①庭園御朱印帳への取組み②その他

◆茨城県支部

⑴会議の開催　①支部総会（郵送）（3月）②反省会・忘年会（12月）

⑵技術事業　①庭園見学会（5月）（11月）②講習会（11月）

＊本部鑑賞会や他支部の事業にも積極的に参加する

◆埼玉県支部

⑴会議の開催　①支部総会（1・30）

⑵技術事業　①研修会（2・4）（6月）（9月）②作品発表会（12月

◆千葉県支部

⑴会議の開催　①新年会（1月）

⑵技術事業　①研修会・内容未定（3月）

◆東京都支部

⑴会議の開催　①支部総会（5月）②役員会（1月）③懇親会（8月）（11月）

⑵技術事業　①庭園工事研修・韮崎大村美術館（6～7月）

◆神奈川支部

⑴会議の開催　①支部総会・役員のみ参加（2・13）②役員会（11月）

⑵技術事業　①土塀講習会（3月中止）②土塀完成披露会（5月）③見学会・鎌倉市内庭園（6月または9月、10月）

◆新潟県支部

⑴会議の開催

⑵技術事業　①支部主催伝統技塾研修会（未定）②勉強会・県外研修（未定）および県内研修（未定）③本部共催研修事業・全国支部長連絡協議会の視察研修の開催④「備忘録田中泰阿弥」発行

◆石川県支部

⑴会議の開催

⑵技術事業　①竹垣講習会　竹垣竹細工（5月・6月）②沼津垣製作体験・松造園内（未定）③井筒蓋、燈籠コモ掛け、縄細工、ロープワーク（11月）④研修会　北山台杉の枝打ち・取り木・手入れ（京都市藤田林業圃場）（未定）

◆静岡県支部

⑴会議の開催

⑵技術事業　①編笠門講習会（月1回）②天空の坪庭展（4月）③安諸塾（予定）

⑶その他の事業　ホームページ作成

◆愛知県支部

⑴会議の開催　①支部総会中止

⑵技術事業　新型コロナウィルスの状況をみて見学会（他県を予定）時期未定

◆近畿支部

⑴会議の開催

⑵技術事業　会員拡大に向け活動

◆岡山県支部

未定

◆広島県支部

コロナが落ち着いてから見学会の開催予定（岡山県真庭方面他）

◆鳥取県支部

⑴会議の開催　①支部総会(2・11)

⑵技術事業　①県内文化財的庭園見学会（鳥取県中部）（未定）

その他、他支部との交流と情報交換

◆島根県支部

⑴会議の開催　①支部総会（1月）

⑵技術事業　①研修会　炭窯の屋根（茅葺）の補修、野点・新潟研修会・はちみつ講習・巨石巡り（日程は検討中）

◆山口県支部

⑴会議の開催　①支部総会、幹事会（5月）

⑵技術事業

◆四国支部

⑴会議の開催　①支部総会（5月）②役員会（3・5）（4・2）

⑵技術事業　①光波測量講習会（1・30延期）（4・23）②見学会商業施設での石積（5月）コロナの感染状況をみてグランドカバー、下草小物類の生産地の視察、見学会を予定

○第四号議案「令和4年度予算説明の件」

予算説明＝加藤財務委員長

令和4年度収支予算（8頁参照）が説明された。

○第五号議案「役員改選の件」

趣旨説明＝高橋会長

今回の役員改選は、任期満了と三橋一夫理事の逝去、坂井昌子理事の退任による補充及び若手の登用、支部長交代に伴って行うものである。

新役員には、理事に北村均氏と曽根将郎氏が選任され、支部長交替により評議員に伊久美和秀氏と米谷進吾氏、新たに伊東正信氏、内山貞文氏、北村葉子氏、小林裕子氏、竹内智子氏が選任された。その他の役員は再任された。

○第六号議案「総会議決事項の委任の件」

趣旨説明＝高橋会長

総会において議決すべき事項として、①令和4年度事業計画に関する件、②令和4年度収支予算の補正及び特別会計に関する件を常務理事会に委任するものとする。

以上、全ての議案は、審議の結果原案とおりで承認された。

令和4年度（一社）日本庭園協会定期総会は内田均副会長の閉会の辞により、無事終了した。

収支計算書

2021 年 1 月 1 日から 2021 年 12 月 31 日まで

（単位：円）

科　　目		予算額	本年度決算額	増　減
Ⅰ 事業活動収支の部				
1，事業活動収入				
入会金収入		100,000	35,000	65,000
会費収入	受取会費	6,500,000	6,510,500	△ 10,500
事業収益	講座収入	425,000	88,000	337,000
	鑑賞研究講演会	60,000	0	60,000
	鑑賞研究見学会	120,000	0	120,000
	庭園協会賞講演会費	0	0	0
	受託事業費	200,000	600,000	△ 400,000
雑収益	受取利息	15	17	△ 2
	雑収益	0	184,520	△ 184,520
事業活動収入計		7,405,015	7,418,037	△ 13,022
2，事業活動支出				
1 事業費支出				
1-1	広報委員会費			
	会報印刷費	1,063,000	912,188	150,812
	会報郵送料	500,000	293,531	206,469
	会報取材編集費	100,000	43,566	56,434
	パンフレット作成費	200,000	0	200,000
1-2	鑑賞研究委員会費			
	鑑賞研究講演会費	120,000	0	120,000
	鑑賞研究見学会	120,000	0	120,000
1-3	技術委員会費			
1-3-1	講座費			
	講師謝礼	300,000	70,000	230,000
	講師旅費交通費	100,000	14,360	85,640
	事務・会場手伝い謝礼	120,000	0	120,000
	講座会場費	195,000	0	195,000
	講座用事務・消耗品費	170,000	600	169,400
1-3-2	地方講演会費			
	講師謝礼	20,000	0	20,000
	講師旅費交通費	60,000	0	60,000
1-3-3	伝統庭園技塾 (仙台)			
	講師謝礼	200,000	0	200,000
	講師旅費交通費	100,000	0	100,000
1-3-4	文化財指定庭園調査会費			
	文化財指定庭園保護協議会年会費	15,000	15,000	0
	文庭協総会負担金	60,000	0	60,000
1-4	国際活動委員会費			
	NAJGA 年会費	50,000	0	50,000
	国際交流費	0	646,064	△ 646,064
1-5	文化財指定庭園調査・修復費	200,000	0	200,000
②管理費支出				
2-1	定期総会費			
	総会用事務・消耗品費	80,000	0	80,000
	庭園協会賞講演会費用	100,000	0	100,000
2-2	会議費			
	事務費	10,000	14,230	△ 4,230
	会場費	100,000	104,882	△ 4,882
	役員交通費補助	28,000	14,000	14,000
2-3	事務局職員給料	1,000,000	960,000	40,000
2-4	事務局職員交通費	240,000	240,000	0
2-5	ホームページ運営管理費			
	ウェブサイト管理費	250,000	198,000	52,000
	サーバードメイン更新料	6,000	0	6,000
2-6	渉外慶弔祝賀費			
	渉外費（関係団体賛助金）	40,000	78,254	△ 38,254
	慶弔費	50,000	0	50,000
	支部活動お祝い金	10,000	0	10,000
2-8	通信費			
	郵便・配送費	100,000	230,692	△ 130,692
	電話料	140,000	129,142	10,858
2-9	事務用品・消耗品費	500,000	158,406	341,594
2-10	宣伝広告費	60,000	77,000	△ 17,000
2-11	水道光熱費	50,000	45,198	4,802
2-12	賃借料			
	事務所家賃	1,000,000	1,021,423	△ 21,423
	コピー機リース料	154,000	184,800	△ 30,800
2-13	銀行手数料等	100,000	75,553	24,447
2-14	会計事務所顧問料	160,000	160,000	0
2-15	諸雑費	10,000	14,000	△ 4,000
百周年事業				
	式典記念講演製本	600,000	40,000	
経常費用計		8,481,000	5,740,889	2,740,111
	当期経常増減額		1,677,148	
	一般正味財産期首残高（昨年度残高）		6,775,035	
	次繰越収支差額		8,452,183	

収支計算書に対する注記

1．資金の範囲

資金の範囲には、現金及び預金、未収会費、立替金及び未払金、前受会費、仮受金を含めている。なお、前期末及び当期末残高は、下記 2．に記載するとおりである。

2．次期繰越収支差額に含まれる資産及び負債の内訳

（単位：円）

科　　目	前期末残高	当期末残高
現金及び預金	6,775,035	8,615,749
合　　計	6,775,035	8,615,749
未払金	0	163,566
源泉所得税預り金	0	0
震災復興庭園寄付預り金	0	0
仮受金	0	0
合　　計	0	163,566
次期繰越収支差額	6,775,035	8,452,183

貸 借 対 照 表

2021 年 12 月 31 日現在

（単位：円）

科　目	金　額	科　目	金　額
Ⅰ　資産の部		Ⅱ　負債の部	
1．流動資産		1．流動負債	163,566
現金	31,000	流動負債合計	163,566
普通預金（みずほ）	1,448,727	負債合計	163,566
振替貯金	7,040,679		
通常貯金（ぱるる）	95,343		
定期預金	0	Ⅲ　正味財産の部	
		1．一般正味財産	8,452,183
流動資産合計	8,615,749	正味財産合計	8,452,183
資産合計	8,615,749	負債及び正味財産合計	8,615,749

財 産 目 録

2021 年 12 月 31 日現在

（単位：円）

科　　目	金　額
Ⅰ　資産の部	
1．流動資産	
現金預金	
現金手許有高	31,000
普通預金　みずほ銀行（メイン）　口座番号　1716382	1,267,722
普通預金　みずほ銀行（国際）　口座番号　1159951	1,000
普通預金　みずほ銀行（技術）口座番号　1159943	180,005
振替貯金　ゆうちょ銀行（寄付金）#00140-4-665089	133,907
振替貯金　ゆうちょ銀行（メイン）#00110-5-76081	6,906,772
通常貯金　ゆうちょ銀行（ぱるる）#00110-5-76081	95,343
定期預金　みずほ銀行	0
資産合計	8,615,749
Ⅱ　負債の部	
1．流動負債	
未払金	163,566
負債合計	163,566
Ⅲ　正味財産	8,452,183

監　査　報　告　書

下記監事 3 名は、一般社団法人日本庭園協会において、会長の提出した 2019 年度における会務の執行を総括した会費収入の「事業活動支出」の内訳並びに「収支決算書」「正味財産増減計算書」「貸借対照表及び財産目録」等につき監査した。

監査の結果、会務の執行は当該協会の定款に基づき誠実に行なわれており、正確に処理されていることをみとめます。

令和 4 年　2 月　3 日

一般社団法人　日本庭園協会

監事　野村 脩／同　中村 寛／同　小泉 隆一

正味財産増減計算書

2021年1月1日から2021年12月31日まで　（単位：円）

科目		予算額	本年度決算額	増減
Ⅰ　一般正味財産増減の部				
1，経常増減の部				
（1）経常収益				
①入会金収入	入会金収入	100,000	35,000	65,000
②会費収入	受取会費	6,500,000	6,510,500	△ 10,500
③事業収益	講座収入	425,000	88,000	337,000
	鑑賞研究講演会	60,000	0	60,000
	鑑賞研究見学会	120,000	0	120,000
	庭園協会賞講演会（総会）費	0	0	0
	受託事業費	200,000	600,000	△ 400,000
	伝法院研修参加費			
④雑収益	受取利息	15	17	△ 2
	雑収益	0	184,52	△ 184,520
			0	
事業活動収入計		7,405,015	7,418,037	△ 13,022
（2）経常費用				
①事業費	広報委員会費			
1-1	会報印刷費	1,063,000	912,188	150,812
	会報郵送料	500,000	293,531	206,469
	会報取材編集費	100,000	43,566	56,434
	パンフレット作成費	200,000	0	200,000
1-2	鑑賞研究委員会費			
	鑑賞研究見講演会費	120,000	0	120,000
	鑑賞研究見学会	120,000	0	120,000
1-3	技術委員会費			
1-3-1	連続講座費			
	講師謝礼	300,000	70,000	230,000
	講師旅費交通費	100,000	14,360	85,640
	事務・会場手伝い謝礼	120,000	0	120,000
	講座会場費	195,000	0	195,000
	講座用事務・消耗品費	170,000	600	169,400
1-3-2	地方講演会費			
	講師謝礼	20,000	0	20,000
	講師旅費交通費	60,000	0	60,000
1-3-3	伝統庭園技塾			
	講師謝礼	200,000	0	200,000
	講師旅費交通費	100,000	0	100,000
1-3-4	文化財指定庭園調査会費			
	文化財指定庭園保護協議会年会費	15,000	15,000	0
	文庭協総会負担金	60,000	0	60,000
1-4	国際活動委員会費			
	NAJGA年会費	50,000	0	50,000
	国際交流費	0	646,064	△ 646,064
1-5	文化財指定庭園調査・修復費	200,000	0	200,000
②管理費				
2-1	定期総会費			
	総会用事務・消耗品費	80,000	0	80,000
	庭園協会賞後援会費	100,000	0	100,000
2-2	会議費			
	会議用事務・消耗品費	10,000	14,230	△ 4,230
	会場費	100,000	104,882	△ 4,882
	役員交通費補助	28,000	14,000	14,000
2-3	事務局職員給料	1,000,000	960,000	40,000
2-4	事務局職員交通費	240,000	240,000	0
2-5	ホームページ運営管理費			
	ウェブサイト管理費	250,000	198,000	52,000
	サーバードメイン更新料	6,000	0	6,000
2-6	渉外慶弔祝賀費			
	渉外費（関係団体賛助金）	40,000	78,254	△ 38,254
	慶弔費	50,000	0	50,000
	支部活動お祝い金	10,000	0	10,000
2-8	通信費			
	郵便・配送費	100,000	230,692	△ 130,692
	電話料	140,000	129,142	10,858
2-9	事務用品・消耗品費	500,000	158,406	341,594
2-10	宣伝広告費	60,000	77,000	△ 17,000
2-11	水道光熱費	50,000	45,198	4,802
2-12	賃借料			
	事務所家賃	1,000,000	1,021,423	△ 21,423
	コピー機リース料	154,000	184,800	△ 30,800
2-13	銀行手数料等	100,000	75,553	24,447
2-14	会計事務所顧問料	160,000	160,000	0
2-15	諸雑費	10,000	14,000	0
	百周年記念事業			
	式典記念講演製本	600,000	40,000	△ 4,000
経常費用計		8,481,000	5,740,889	2,740,111
	当期経常増減額		1,677,148	
	当期一般正味財産増減額		1,677,148	
	一般正味財産期首残高		6,775,035	
Ⅱ 正味財産期末残高			8,452,183	

2022年度予算書

2022年1月1日から2022年12月31日まで　（単位：円）

科目		2021年度実績	2022年度予算額	備考
Ⅰ　事業活動収支の部				
1，事業活動収入				
①入会金収入	入会金収入	35,000	100,000	
②会費収入	受取会費	6,497,500	6,500,000	
③事業収益	講座収入	88,000	450,000	
	鑑賞研究講演会	0	60,000	
	鑑賞研究見学会	0	120,000	
	庭園協会賞講演会費	0	0	
	受託事業費	600,000	100,000	・モスクワ日本庭園修復は2022年度の見通し立たず
④雑収益	受取利息	17	15	
	その他	184,520	0	
事業活動収入計		7,405,037	7,330,015	
2，事業活動支出				
1 事業費支出				
1-1	広報委員会費			
	会報印刷費	912,188	1,100,000	
	会報郵送料	293,531	500,000	
	会報取材編集費	43,566	100,000	
	パンフレット作成費	0	200,000	
1-2	鑑賞研究委員会費			
	鑑賞研究講演会費	0	60,000	
	鑑賞研究見学会	0	100,000	
1-3	技術委員会費			
1-3-1	講座費			ロングラン講演会ほか
	講師謝礼	70,000	300,000	
	講師旅費交通費	14,360	100,000	
	事務・会場手伝い謝礼	0	120,000	
	講座会場費	0	195,000	
	講座用事務・消耗品費	600	170,000	
1-3-2	地方講演会費			
	講師謝礼	0	20,000	
	講師旅費交通費	0	60,000	
1-3-3	伝統庭園技塾			
	講師謝礼	0	200,000	
	講師旅費交通費	0	100,000	
1-3-4	文化財指定庭園調査会費			
	文化財指定庭園保護協議会年会費	15,000	15,000	
	文庭協総会負担金	0	60,000	
1-4	国際活動委員会費			
	NAJGA年会費	0	50,000	
	国際交流費	646,064	100,000	
1-5	文化財指定庭園調査・修復費	0	200,000	
2　管理費支出				
2-1	定期総会費			
	総会用事務・消耗品費	0	80,000	
	庭園協会賞講演会費用	0	100,000	
2-2	会議費			
	事務費	14,230	10,000	
	会場費	104,882	100,000	
	役員交通費補助	14,000	28,000	
2-3	事務局職員給料	960,000	1,000,000	
2-4	事務局職員交通費	240,000	240,000	
2-5	ホームページ運営管理費			
	ウェブサイト管理費	198,000	250,000	
	サーバードメイン更新料	0	6,000	
2-6	渉外慶弔祝賀費			
	渉外費（関係団体賛助金）	78,254	100,000	
	慶弔費	0	50,000	
	支部活動お祝い金	0	50,000	
2-8	通信費			
	郵便・配送費	230,692	250,000	
	電話料	129,142	140,000	
2-9	事務用品・消耗品費	158,406	200,000	
2-10	宣伝広告費	77,000	80,000	
2-11	水道光熱費	45,198	50,000	
2-12	賃借料			
	事務所家賃	1,021,423	1,000,000	
	コピー機リース料	184,800	190,000	
2-13	銀行手数料等	75,350	100,000	
2-14	会計事務所顧問料	160,000	80,000	
2-15	諸雑費	14,000	14,000	
百周年事業				
	式典記念講演製本	40,000	600,000	
	庭園学会誌復興庭園掲載号購入			
事業活動支出予算計		5,740,686	8,468,000	

緑と水の市民カレッジ「みんなの緑学」講座

現代日本庭園の巨匠たち～その作庭手法と庭園観～

「現代日本庭園の巨匠たち」講座を始めるにあたって

龍居 竹之介（名誉会長）

最近、日本庭園協会の勉強会などで、当協会とともに歩まれた優れた大先輩について、よく存じあげないという話を時々耳にする。そこで、一つの企てとして私の知る大先輩方の横顔について語ることを考えました。

実は、昭和の末に、当時の協会の大幹部であった3人の方が立て続けに亡くなったとき、その薫陶を得た門下生というべき方々とともに三先人の足跡を讃える催しを開いた。私はその催しの最後を「三先人に学ぶべし、ただし神格化はしないこと」と締めくくった。しかし、30年余が過ぎた今、現実は神格化するどころか、逆に尊名も存じあげないといった空気さえ感じられることに驚かされたのである。

この三先人とは、岩城亀太郎（1898-1988）、斉藤勝雄（1893-1987）、小形研三（1912-1988）の諸氏である。そこで、今回はこの方々とそれ以前に長逝された飯田十基氏（1890-1977）を加えた4人の方について、私なりに目で見た幾ばくかの一面を語りたいと始めたのが本講座です。

それでは、第1回は岩城亀太郎さんを取り上げます。まずは亀太郎さんのお孫さんで、株式会社岩城の現社長である岩城隆さんのご登場です。

【岩城亀太郎プロフィール】

1898年京都生まれ。植治で番頭を務め、東京に進出し、岩城庭園研究所（現（株）岩城）を設立。庭匠から作庭家、造園家へと社会から高い評価を受ける。常務理事就任後、伝統庭園実技研修会（国営武蔵丘陵森林公園）を開催。後に「伝統庭園技塾」と改め、塾長として第8回まで開塾し、次代を担う後進育成にと植治伝来の伝統技法を伝授。第9代理事長として、『庭園協会ニュース』第1号を発行。主な作品は、迎賓館赤坂離宮和風別館庭園、平櫛田中邸（現小平市平櫛田中彫刻美術館）庭園、古峯神社ほか多数。1988年没。

第1回　岩城亀太郎（いわきせんたろう）

2019年11月9日
緑と水の市民カレッジ

祖父 岩城亀太郎の横顔

岩城隆（株式会社 岩城 代表取締役）

はじめに

「現代日本庭園の巨匠」の第1回に私の祖父岩城亀太郎が取り上げられてまことに光栄でございます。思いつくままに岩城亀太郎（以降、亀太郎）のプライベートといいますか、横顔を紹介したいと思います。

亀太郎は1898（明治31）年生まれで、生きていれば今年は121歳ですが、1988（昭和63）年に90歳で亡くなり、没後31年となります。なかなかの長寿でした。

亀太郎は私の母方の祖父になります。なぜ母方の祖父なのに岩城姓かといいますと、亀太郎自身には子供がなく、姪である私の母を養女としました。そんなわけで、私の母が岩城という姓を継いでいるということです。

【岩城 隆プロフィール】

岩城亀太郎の孫。1956年生まれ、東京都出身。大学卒業と同時に岩城造園株式会社に入社。現職株式会社岩城代表取締役。趣味：読書、音楽、ドライブ。座右の銘：人格以上の庭はつくれない。尊敬する人：岩城亀太郎

植治入門

亀太郎は、京都の今でいう長岡京市というところで8人兄弟の末っ子として生まれました。家は農家で、豪農ではないですが、結構生活にはゆとりがあったと聞いております。幼い頃から植治こと7代目小川治兵衛（以降、植治）をそばで見ており、いずれ植治に入門したいという気持ちはあったのかと思います。

植治は1860（万延元）年の生まれで、1933（昭和8）年に73歳でなくなりました。当時としては長生きでした。実は、植治も養子で、18歳の時に小川家に養子として入りました。旧姓は山本で、その山本家が亀太郎の母親の生家です。つまり亀太郎の母親と植治は、姉弟と

いうことです。

亘太郎は16歳で植治のもとに入門しました。叔父さんのようになりたいというあこがれと希望が強かったと思います。その当時の植治は、京都の長者番付に載っていたというほど、威勢がよかったと聞いております。亘太郎は非常に趣味の多い人で、お茶、お花はもとより、謡や能、あるいは若い頃にはゴルフもやっていて、その趣味を通じていろいろな人との交流をもっていました。おそらく叔父である植治の手法をまねていたのだろうと思います。植治の家は京都の三条白川にありまして、近くの祇園町に足しげく通って、人脈をつくったと聞きました。亘太郎もそれを見習ったと思います。今のような異業種交流会というのはありませんので、一つのサロンとしてそういう場に出入りして、顔を広げて、仕事をしていった、一つの営業活動と私は理解しています。

東京進出

１９２４（大正13）年頃、植治の長男白楊（１８８２-１９２６）は、都ホテルの喜寿庵（後に佳水園庭園）の作庭などを手掛けていました。この庭は白楊と亘太郎の共作だと亘太郎からは聞いていました。完成の２年後、１９２６（昭和元）年に白楊は45歳の若さで亡くなります。

亘太郎が上京するきっかけは、東京の長尾欽弥邸の作庭を植治が受けたことにあります。植治と長尾欽弥（以降、長尾）との接点は詳しくは知りませんが、東京深沢の本邸（宜雨荘）、鎌倉別邸（扇湖山荘）の作庭のために、１９３１（昭和６）年に亘太郎は上京します。１９３２（昭和７）年からは唐津の隣松園の作庭に取り掛かります。翌１９３３（昭和８）年の暮れに植治は亡くなります。

長尾という方に、私は直接会ったことはありませんが、亘太郎や私の母から話を聞くと、豪傑、豪快な方だったようです。１９２９（昭和４）年、長尾は妻よね とともに「合資会社栄養と育児の会（現わかもと製薬株式会社）」を設立し栄養剤「若素（わかもと）」を売り出します。これが爆発的に売れて巨万の富を得たということであります。薬九層倍とよくいいますが、一つ当たるとすごく儲けが出ると聞いております。

長尾夫妻が本邸を構えたのは東京の深沢で、敷地は約１万坪ありました。この土地は、東京信託株式会社が関東で初めて郊外開発した住宅地でした。東京急行電鉄（東急）の鉄道路線、通称「玉電」が渋谷から出ていましたが、その土地を分譲するためにわざわざ新しく駅をつくったということです。全５００区画、１区画１０００坪くらいを最低単位としたお屋敷がつくられました。どういう人たちが購入したかというと、主に軍関係の人達で、しかもエリートの海軍の上級将校たちがその辺りに屋敷を構えたということです。

本邸は、現在の都立深沢高校の辺りで、敷地は深沢高校の倍はあったようで、庭の境界がどこからどこまでなのかわからないくらいの広さだったと聞いております。戦後は、財閥解体や会社内での労働争議などにより、長尾はすべてを失ってしまいました。収集した美術品も一時は財団法人長尾美術館を設立し、そこで保管をしていましたが、やがてそれもすべて流出してしまいました。最晩年の長尾欽弥は寂しい人生だったと思います。しかし、わずか25年の間でしたが、長尾夫妻は太く短くいい時代を過ごしたと思います。

長尾は「わかもと」で得た莫大なお金を陸軍、海軍や政界へ支援しており、本邸にはそういった関係の人達が集まり夜な夜な大宴会をしていたという話を聞いております。

だいたい、当時の大富豪という方々は、こぞって大きな屋敷や庭園をつくり、いろいろな人を呼んで大園遊会をするというのが流行りだったようです。

亘太郎は宜雨荘の造園（図1、2）に、足掛け10年くらい掛かったそうです。当初は京都から東京に出張という形で来ていました。長尾は京都から茶人や大工などを呼び、彼らは本邸近くに家を建て住むようになったと聞いております。その中の一人が岩城亘太郎でした。

図1　宜雨荘 完成時は7,500坪の大邸宅　数寄屋造りの邸宅（設計は大江新太郎）の前に緩やかな起伏の芝庭が広がる（撮影1930年頃　長尾資料館提供）

図2　宜雨荘 流れ施工中（撮影1931～40年頃 長尾資料館提供）

5、6年で帰るつもりが、東京に居を構えて、ここでやろうと思うようになった亘太郎の胸中を察しますと、複雑なものがあったのではないかと思います。宜雨荘の造園に掛かってる頃、植治は他界する前後ですし、白楊はとうになくなっています。そんな状況で亘太郎も断腸の思いで東京に居を移し、足場をつくったということではないかと想像ができます。これからは東京だと、京都ではないんだと、それを後押ししたのが、おそらく長尾夫妻だと思いますし、亘太郎本人からもそのような話を聞きました。

長尾関係の仕事が一通り終わって、1939（昭和14）年に岩城庭園研究所を世田谷区深沢の地に開設しました。それから約80年経っています。

私が、亘太郎の代表作を三つ挙げるとすれば、一つには、1964（昭和39）年、オリンピック前に開業したホテルニューオータニの日本庭園、1978（昭和53）年、栃木県鹿沼の古峯神社の古峯園（図3）、三つ目は、伊勢神宮内宮の松下幸之助が奉納した茶室の露地（図4）です。この三つは私も亘太郎について回って、亘太郎自身からいろいろな薫陶を受けました。

図3　古峯神社 ヒノキの巨木と遠景の山並み
（『庭別冊42』建築資料研究社、1985）

図4　伊勢神宮の茶庭 工事中の庭門で職人さんと挨拶を交わす
（『庭別冊42』建築資料研究社、1985）

晩年の岩城亘太郎

私は、32年間、亘太郎と寝食を共にして、いろいろな意味での薫陶を受けました。祖父母、父母と私の兄弟と姉の家族の他、泊まり込みの社員1名、お手伝いさんが2人と犬が1匹といった大家族でありました。数寄屋造りの大きな家に32年間一緒に暮らしましたが、私はただの一度も亘太郎から叱られたことはありません。大きな声を出しているところも聞いていません。何といいますか泰然自若とした姿を見ておりました。

その大家族の頂点に君臨していたのは、亘太郎の妻えいです。えいが、小言を亘太郎に言っても糠に釘といいますか、柳の木のように、さらさらとかわして、すっとどこかに行ってしまうといったようにかわすのも非常にうまかったように思います。

私も、そのような立ち居振る舞いを習って、なるべく怒らない、争わないということを信条として、日々生活しております。

晩年の亘太郎の一日をご紹介しますと、夜は宵っ張りで朝は遅かったようです。朝はかならず朝風呂に入ります。その後お経を読みまして、11時くらいに朝食をとります。だいたい焼き魚と生卵二つ、焼きのり、おひたし、鶏のレバーなどにごはんと味噌汁で、毎日同じようなメニューでした。食後には抹茶を一服飲んでおりました。これは鮮明に記憶しております。とにかく健啖家で、食べることが大好きな亘太郎でした。

印象的なのは、すっぽん屋です。京都の「大市」というすっぽん屋に私もよく連れて行ってもらいました。すっぽん料理は精がつくようで、元気の源だったと思います。

バランスの良い食事をとり、規則正しい生活をして、晩年はお酒もほとんど飲むこともありませんでした。ただ、ダンヒルのタバコだけは、ダンヒルのライターと共に死ぬまで手放さず、トレードマークの一つになっていました。家に帰ってくると、大島の着物を着流しで着て、出掛けるときは頭のてっぺんから靴まで全部舶来物で誂えておりました。とても粋でおしゃれなおじいさんだったと記憶しております。

おわりに

最後に、亘太郎を語る上で大事な2人のキーマンとして、植治こと7代目小川治兵衛、そして長尾欽弥が挙げられます。この2人との出会いがなければ、違った人生を歩んでいたと思いますし、私もこの場にいないかもわかりません。

生前、「人格以上の庭はつくれない」ということをよくよく言っておりました。これは私なりに解釈すると、いい仕事をするためには、自分の人格を磨けということだと思います。私もまだまだこれから精進して、さらに良い仕事をしていきたいと考えております。岩城亘太郎の人となりが皆様に少しでもお伝えできれば幸いでございます。

（文中、敬称略とさせていただきました）

私説・岩城亘太郎師の人と仕事を読む

龍居 竹之介（名誉会長）

岩城隆社長からのお話とダブるところがあるかもしれませんが、違った目で岩城亘太郎師を見ていることで勘弁していただきたいと思います。

1．岩城亘太郎師の時に応じた動き

（1）植治での修業期

●小川治兵衛に庭匠のあり方を学び、小川白楊に技と美への目、人の知り方、夢の抱き方を学ぶ

岩城亘太郎が、「庭匠のあり方を学んだ」のは、叔父の7代目小川治兵衛（以降、植治）（1860-1933）というよりも、むしろ植治の息子で将来8代目を継ぐはずの小川白楊（1882-1926）でした。白楊が、亘太郎の面倒をみていたということです。亘太郎も白楊を兄貴分として慕っていたようです。

亘太郎は京都から少し西、現在の長岡京市の出身です。植治もそこの出身で、郷里では、京都に出て大成功した人として評判でした。亘太郎は、小さい頃から京都のおじさんは神様のように偉い人だと思っていたそうで、近寄りがたいところもあって、その分だけ、息子の白楊とつながりが強くなったのかもしれません。

そのことが亘太郎にとっては幸いだったのです。白楊は1926（昭和元）年に45歳で亡くなります。亡くなってから、こんなに白楊の友達がいたのかというほどに旅館の主人やお坊さんなどとの付き合いがあったことがわかりました。

白楊は、庭の材料である石材に詳しく、石灯籠や手水鉢など、そして発掘した瓦のようなものについても非常に勉強していました。亘太郎は白楊から「技と美への目」を学んでいました。後年になって亘太郎が、たいへん石造品に詳しかったというのは、白楊の影響だったわけです。何が美しい、どういうものがいいのかという鑑識眼を、知らず知らずのうちに白楊から習い覚えていたと私は思っております。亘太郎にとっては、白楊が人間形成の上で大きな力になったと思います。

その白楊が早く亡くなったことで、自分が独立していかなければならないという思いに至ったのです。独立にあたって、白楊を通じて知り合った友人たちが大変力になりました。私の父、龍居松之助（1884-1961）もその一人でした。

実は白楊は、造園の学校をつくりたかったのです。造園の学校が必要だと言って、京都と奈良の間ぐらいに学校の敷地にするような土地を物色して歩いていました。その時、一緒に歩きまわっていたのが松之助（註1）でした。白楊は、非常に先を読むことのできる庭師でした。亘太郎は、白楊と松之助との交流から夢の抱き方を学びました。

亘太郎は植治という大親方の甥で、端からは植治の一族と見られていました。一時、この植治にわらじを脱いでいた斉藤勝雄（1893-1987）は、後に酒の席で、そこでの経験を話しています。「岩城さんは飯食うのは座敷だったよな。私らは板の間だよ」、「今みたいにこんなに気安く話をする機会はなかった。この人は偉いんだから」と。このように一族である亘太郎と修行中の斉藤とは、格差があったということです。亘太郎にとっては、そのような地位にいたことで、人に恵まれ、いろいろなチャンスにも恵まれ、勉強の面では得をした人と言えるでしょう。

●「仰角大借景庭園」と「露地」の作庭経験

植治が一番売れたのは、京都の南禅寺界隈での作庭でしょう。1906（明治39）年頃から塚本与三次（1884-1934）は、東山の山麓に別荘地開発に取り組み始めました。今の南禅寺界隈で野村別邸（碧雲荘）、細川別邸（怡園）や岩崎別邸（流響院）など関西や東京の実業家が別荘を設けました。それらの屋敷に植治が専属で庭をつくりました。

この一帯の作庭を通じて、東山を借景とした大規模な庭づくりを植治が確立したといえるでしょう。そこで亘太郎が学んだ借景庭園は、雄大な景色を仰ぎ見ながら自分の庭を歩く、そういう楽しみ方ができます。このような庭園を私なりに名付けたのが、「仰角大借景庭園」です。

一方で露地、いわゆる茶庭もつくられました。眺める庭と使う庭と両方を学べたということが大きな力になりました。

●財閥、政治家、茶人、建築家と知遇

東山を望む南禅寺界隈に別荘を設けたのは、明治期の財閥、政治家、

図5　隣松園 マツと芝生越しに琵琶湖を望む
（撮影年不明　長尾資料館提供）

茶人、建築家といった多彩な、しかも地位的にたいへん高い人達です。その屋敷の庭をつくり、管理することで、当然、屋敷の主人との付き合いも深くなってきます。これらの知遇も、植治での修行期に亘太郎が得た大きな動き方でした。

（2）「植治」内での自己形成期から独立へ

●京都から東京への舞台転換

白楊が亡くなると、「植治」内での亘太郎の地位も微妙となり、京都から東京へというルートが自然にできるわけです。現在の国際文化会館の場所に、植治が庭をつくることになり、「植治」の東京支店ができました。1932（昭和7）年、亘太郎は東京支店の支店長ということで東京に出てきました。

その後、1939（昭和14）年に岩城庭園研究所の看板を出して独立しました。独立の際、力になったのが、後の「わかもと製薬株式会社」の創業者 長尾欽弥（1892-1980）という人物でした。長尾関係の大きな仕事を進めていけるということが確実になったときでした。

図6　隣松園 伸びやかな芝生に白砂の小径
（撮影年不明　長尾資料館提供）

●京都での知遇を基本に東京でそれをさらに増やす

長尾との知遇は、琵琶湖のほとりに長尾が設けた「隣松園」にはじまります。隣松園とは名木「唐崎の松」の隣であることに由来します。要するに、庭の目の前は琵琶湖です。「隣松園（図5、6）」では、庭づくりのスタイルの幅が広がり、「広角水平借景庭園」を体現しました。

「広角水平借景庭園」は、目の前に広がる琵琶湖とさらに湖水をへだてた対岸までも庭園に取り込んでいます。

もう一つ、長尾の別荘「扇湖山荘」の庭（図7、8、9）も手掛けました。ここは鎌倉の山の上に位置しており、山の上から望む景色の先に扇型の海が見えるという借景の庭です。私は、これを「立体借景庭園」と呼びます。仰ぎ見る借景、水平に広がる借景と俯瞰する借景というように、亘太郎はつぎつぎと技を学んでいきました。

図7　扇湖山荘 山の上に建つ別荘2階から相模湾を望む
（撮影年不明　長尾資料館提供）

●室内の庭とビル屋上の庭への関心度の高さ増大

東京に出て、一番に関心を持ったのは、室内の庭とビルの屋上の庭です。

亘太郎が東京に出てきて間もない頃、長尾の仕事の相談に松之助を訪

図8　扇湖山荘 頂部の山荘母屋から南斜面に続く修景
（撮影年不明　長尾資料館提供）

図9　扇湖山荘 沢状地形を活かした茶庭（右奥は茶室）
（昭和30年代頃　長尾資料館提供）

ねて我が家を訪れましたが、あいにく父は留守で、近所の喫茶店で3、4時間待たされました。その喫茶店内に庭があったのです。待つ間に「室内の庭園は面白い、もっと考えよう」と思い立ったということです。

また、新宿にあった百貨店「ほてい屋」の屋上に行くと、そこにも庭がありました。それを見てもっと工夫したら面白いのではと考えます。東京に出てきてから、亘太郎がつかんだヒントが室内や屋上などの商売をする場所です。邸宅の庭をつくるというのとは、視点がちがっています。人工的な空間の庭にも頭が働いている。頭のいい人だと思わざるを得ないのであります。

亘太郎は、長尾邸のような大きな邸宅の庭をつくるだけではなく、もっと視野の広い人でした。東京へ来てからはいろいろなことを蓄積し、知恵を膨らませていきました。

(3) 蓄積した才覚を現した終戦直後の動き

●三軒茶屋の西の住人の華やかさに対し、南の住人は庭にこだわる

終戦直後、東京の庭社会で一番華やかだったのは「東京植木」でした。世田谷区三軒茶屋の西、太子堂に会社はあり、私は勝手に「西の住人」と呼んでいました。横溝政吉さんという頭のいい大親方が率いる会社で特別調達庁が発注する仕事を表看板として受けていました。

特別調達庁は、進駐軍（占領下における連合軍部隊）や日本政府の需要する物資や役務の調達を担っており、進駐軍のキャンプの管理業務などにも関係していました。

終戦まもない昭和20年代初めは、普通に考えても庭関連の仕事のなかった時期です。それまで庭の仕事をしていた人の多くは、進駐軍キャンプの仕事に行くようになるわけです。東京の植木屋さんはもちろん、東京以外の植木屋さんもキャンプの仕事を仕切っていた「東京植木」に行っていました。

それとは対照的に「南の住人」と私が呼んでいたのが亘太郎です。こちらは、同じ世田谷区の深沢で太子堂の南西にあたりました。亘太郎は公共的な仕事はなるべく避けて、それよりも個人の施主との長い付き合いを大事にしたかったようで、「私は、キャンプの芝張りよりも庭をつくりたい」とでもいわんばかりに、それまでに培った人脈を大事にしつつ仕事を広げて行きました。

戦後、社会が一変しましたが、会社では昔付き合った方の部下が偉くなっていたり、料亭では、以前従業員として働いていた人がおかみになっていたりしました。社会が落ち着いてくると、商売を再開することになり、「岩城さん、なんとかしてよ」という話から徐々に口コミと人脈で個人の庭の仕事が増えてきました。

後になって、「岩城さんとこは個人の庭しかしない、あそこは偉そうだ」という人がいましたが、そうではなく、ずっと前からの準備の成果でした。

(4) 蓄積したアイデアの実践期の到来

●ビル屋上庭園づくりの着実な実践

長年やってきたことが身に付き、技の幅が広がって、それらを活かす時代の到来です。

ビルの屋上庭園は戦前から考えていたことです。第18回東京オリンピック競技大会（1964年開催）の誘致後、東京には高層ビルが増えてきます。建設にあたって建物本体だけではなく、それ以外の要素も必要だという判断が大きくなってきました。それが、一つの風潮になってくると、亘太郎が長年考えていた屋上はじめ、地下などの屋内空間に作庭する技術を使うときがやってくるわけです。有楽町のビル地下の「胡蝶」という料亭の庭は、その一つの例です。

●公共建築との融和を図る作品の提供

公共造園では、日本的なカラーを持った景色づくりはともすればアンバランスになってしまいがちですが、それをうまく成し遂げました。それが、今も見られる三宅坂の最高裁判所や桜田門の警視庁本部庁舎の外部空間です。特別にどうということのない植栽ですが、亘太郎だからこうやるんだろうという扱い方があるわけです。

●商業建築との融和を図る作品の提供

私がすごかったなぁと思うのは、「明治座の竹庭」です。1階から3階までの吹き抜けの部分に竹を植える。すると1階からは根元の部分が見え、2階では幹の部分、3階へ行けば、葉っぱが良く見えてくる。それぞれの階で竹の見え方が違うし、竹の子の生長までも楽しめました。非常に狭いスペースなんですが、立体的なところを利用して景色をつくる。これも長年温めてきたアイデアの一つだったと思います。

「ホテルニューオータニ」では日本的なカラーの庭園をつくりまし

た。亘太郎は与えられた箇所に対して、建物の躯体が決まってから庭を考えるのではなく、躯体ができる前に必ず注文を付けています。人工地盤ではきちんと土が入るように、梁は逆梁にして土が入るようにと、そういうことまで、気を使って指示していました。こういうことは一朝一夕ではできないことです。

●ゴルフ場の日本庭園化で大型地形の環境整備を体現

晩年には、ゴルフ場に日本庭園をつくるというのがありました。ホールごとに趣の違う日本式の庭の景色をつくるという独創的なもので、単にゴルフコースの横に庭をつくるというのではなく、コースが庭だということです。

●神社に個性ある境内庭園を生む

広い神社境内には、何かしら空地があります。そういうものを活用しながら、元の形は崩さず、新しい眺めを生んでいくという工夫をまたしていました。

栃木県の古峯神社、三重県の椿大社や伊勢神宮に庭をつくったのは晩年のことですが、新しさがあります。新しさとはいっても古色のよさもふくませた新しさです。

以上が、植治に入門してから晩年までのその時々に応じた動きです。これらは一見切れているようですが、亘太郎の考えは生涯を通じて全部見事につながっています。それもその時その時の時勢に合わせて自分なりに開発、創出してきた技術を自在に駆使しての成果だったのは立派です。

(5) 確実な事業継承

創業以来、個人のアイデア、技術主体による体制を組織化して拡充し、運営する方針を早くから主張していました。

三代目である現社長の岩城隆さんが随分お小さい頃でした。亘太郎は、「この子には経営方法を十分に勉強してもらう」というようなことを何かにつけて、嬉しそうに話していました。こんな幼いお孫さんにおじいちゃんはもう新たな課題を託しているのかと、びっくりしきりでした。

2. 岩城亘太郎師の広範な交遊

(1) 京都での交遊

京都で培った人との交遊は、白楊を通じての文人、茶道家など各界の人が多数を占めています。同業者だけではなく広い人たちとの交遊がありました。その中で、重森三玲、龍居松之助などもそれに連なる一人でした。この二人は庭の世界にからむ人の中では、ちょっと変わり者ですが、白楊は少しヘソまがりが好きだったのかもしれません。亘太郎はそれらの交遊を引き継ぎ、その付き合いを大切にしてきたものでした。

(2) 東京での交流

建築家では大江新太郎(1879-1935)との交流が挙げられます。大江は現在の国際文化会館が建つ以前にあった岩崎小彌太の邸宅や鎌倉山の扇湖山荘(図10)の設計者です。大江は庭園協会の役員もしており、東京帝国大学で「庭園学」の講義を持つほど庭、特に茶庭に詳しく、庭に関する著書(註2)もありました。なかなか庭にはうるさい大先生に就いたことも亘太郎には大きな力になったと思います。

大江にはじまり、吉田五十八(1894-1974)を経て若い建築家たちとも長い付き合いをしていました。吉田との付き合いは、料亭関係の仕事が多かったようです。吉田の目指す新しい数寄屋建築は、同じく新しい数寄屋の庭園を目指す亘太郎と考えが一緒になったところです。ことに、吉田は庭に大変愛着があり、思い入れがあるところから、作庭者としては大変だったろうかとも思います。

図10 扇湖山荘 大江新太郎設計の山荘母屋
(撮影年不明 長尾資料館提供)

それだけに、晩年、「吉田五十八賞」を受賞した際の亘太郎は本当に嬉しそうでした。亘太郎が受賞して喜んでいたのが、もう一度ありました。裏千家の「淡々斎茶道文化賞」です。この二つの受賞は亘太郎にとって心底嬉しかったと思います。とにかく、分野の違う世界の人から認められたこと、この喜びの大きさは、第三者には計り知れないものがあると思います。

政治家では河野一郎と一番親しかったようです。河野の秘書だった

宇野宗佑は、後に日本庭園協会の第8代理事長（後に名誉会長）になった方で、河野との関係から縦のつながりができ、後々に続いているということです。

赤坂の「川崎」など、料亭の仕事も多かったようです。料亭の客には、政治家、実業家などが多く、新たな顧客とのつながりには、大変強いということがありました。財界では鹿島建設の鹿島守之助や北海道炭鉱汽船（北炭）の萩原吉太郎との付き合いも料亭から始まったのでしょう。

また、お能、お茶などとの世界とも幅広く深く関わった。そういった力は、庭づくりにはすべて注入されていたように思います。

（3）新進造園家との交流

大阪の荒木芳邦（1921-1997）や東京の伊藤邦衛（1924-2016）との交流も紹介しておきます。

荒木は、戦後まもなくから昭和40年代に日本の国内外で大活躍した造園家です。自身の息子くらいの年齢の荒木に、亘太郎はアイデアや図面を提供させていました。さらに、自社の設計部に招き、図面など社内教育の講師も依頼していました。

伊藤は、清水建設を経て伊藤造園設計事務所を設立しました。伊藤は、清水建設時代から非常に斬新なデザインの空間を生み出し、独立後も活躍していました。亘太郎は、伊藤からもその持ち味を生かしたデザイン力を借りていました。

良くなるのであれば若い人の力も借りる。それが素直にできる人でした。こういったところが、私が見ている亘太郎の広範な付き合いぶりです。

3．岩城亘太郎師の特質

（1）関心・醸成・発散

庭の視点を仰角、広角水平、立体構成、宙空、地下、多彩地形などに置くことに〈関心〉を寄せ、いろいろな庭のあり様を想像できる、そういうものに先ず関心をよせる。そして、その実現に向けて長時間をかけて考えを〈醸成〉させる。京都から東京に来てから考え続けている。亘太郎は醸成期間が長いのです。そして、機を見て誕生〈発散〉させる。

私は、関心、醸成、発散というのが、亘太郎の庭づくりの一つのあり方だと思います。

（2）不断の心掛けのよさ

あらゆるオーダーにすぐ対応できる心と材料の準備を欠かさない。これは、できそうでできません。

蹲踞を組むときに、よく話をしていました。蹲踞を組むときに、あわてて役石をそろえるなんてことはとんでもない。私は、水鉢を一つ手に入れたら、これにはどういう役石が必要なのかを考えて、前石、手燭石、湯桶石を選んで蹲踞の石組としてワンセットとしている。このように言われていたことをいまだに忘れません。何につけても、その準備が大事だということを常に言っていました。あらゆるオーダーに対応できる心と材料の準備を欠かさないというのが亘太郎の特質だと思います。

以上のことから、私は亘太郎を全天候型戦闘機ならぬ全天候長距離型庭匠としか思えないのであります。

おわりに

最後に、私の耳に残った亘太郎師の言葉を挙げてまとめとします。

○少年時代のこと
京都の叔父さん（七代目小川治兵衛）は親戚一同の誇り。別格の人やった

○植治入りのころ
七代目の外交と店内の統率のうまさは少しずつわかって勉強になった

○小川白楊のこと
物知りで幅が広かった従兄弟は、石造品から考古学、写真（カメラ）などまで、よき師匠やった。幅広くいろいろな人を知って学ぶことも白楊が教えてくれた

○東京へ出てみて
屋上の庭、室内の庭、そんなもんを普通にできてるのやなと驚き夢中になった

○茶の湯に親しむ
いまの庭師で茶をよく知るのは私と田中（泰治／泰阿弥）だけだろう

○会社経営
総務部がある庭屋はめずらしいといわれて驚いた。隆には経営を学ばす気や

○私筆者（龍居）が53歳の時
幾つになった？えっ53歳。ええ歳や、うらやましいナ。気張ンなはれ

関西で生まれ、学び、関東で飛躍した岩城亘太郎師は、古典文化に通じつつ、現代、未来の庭像についても確信を持ちました。だから、広く国内外に飛躍しつつも、常に基本には自身が学び開拓した現代日本の味が香ったのでしょう。

註1　1924（大正13）年、東京高等造園学校（現東京農業大学造園科学科）の設立に尽力し、1931（昭和6）年、同校の第2代校長に就任

註2　『敷石・飛石・手水鉢』造園叢書7、雄山閣、1929

第1回　岩城亘太郎　庭を訪ねる・その仕事を見る・知る・語る

岩城亘太郎の代表作～ホテルニューオータニ 日本庭園

荒川淳良

2019年12月7日
TKP麹町駅前会議室・ホテルニューオータニ日本庭園

はじめに

岩城亘太郎（以下、亘太郎）が京都から上京し、「岩城庭園研究所」を設立してから、今年で80年になります。この節目でこのようなお話をさせていただき非常に光栄に思います。

私が入社した1988年の秋に、亘太郎は亡くなりましたので、亘太郎から直に教えを乞うた時期は半年間で、施工現場で会ったのは、2、3回ぐらいでした。亘太郎が現場に来ると、現場はピリッと緊張していたという記憶だけは鮮明に残っています。

そんな亘太郎の代表作の一つ、ホテルニューオータニ（千代田区紀尾井町）の庭園を紹介します。

【荒川 淳良プロフィール】

1963年生まれ。神奈川県横浜市出身。東京農業大学造園学科卒。1988年、株式会社岩城（旧岩城造園株式会社）入社。現在、取締役設計部長。主な受賞歴：2011年、キッコーマン御用蔵移築リニューアル、グッドデザイン賞。2012年、妻沼の家、モダンリビング特別賞。2015年、佐原古民家再生プロジェクト、日本建築学会賞。2020年、ザ・カハラ・ホテル＆リゾート横浜、Andrew Martin Interior Design of the Year。好きな庭園：旧竹林院庭園、永保寺庭園、本間氏別邸庭園

庭園の概要

ホテルニューオータニは1964（昭和39）年に、現在はザ・メインと呼ばれる本館が竣工しました。1974（昭和49）年にガーデンタワー、1991（平成3）年にガーデンコートが建設されました。庭園の竣工は1974（昭和49）年で、その時の全体平面図（図1）です。右下の四角い部分には、後にガーデンコートが建設されましたので、この周辺の庭園は改修されています。改修時には、私も現場で作業していました。

竣工当時の庭園面積は、13,600㎡です。現在は若干狭くなっていますが、それでも都内では広大な面積を有している庭園であると思います。

図中の赤い線から西側の部分には、井伊家中屋敷時代の庭が現在も残っています。ほとんどが植栽ですが、一部、当時の名残が見られる箇所もあります。

真ん中の青い線で囲んだ部分がホテルニューオータニ創業者大谷米太郎（以下、大谷）の自宅でした。現在は「なだ万本店」が営む料亭「山茶花荘」の建物があります。「なだ万」はもともと関西の料理屋でしたが、大谷がホテルオープンに合わせて呼び寄せ、自邸を料亭風に改装しました。

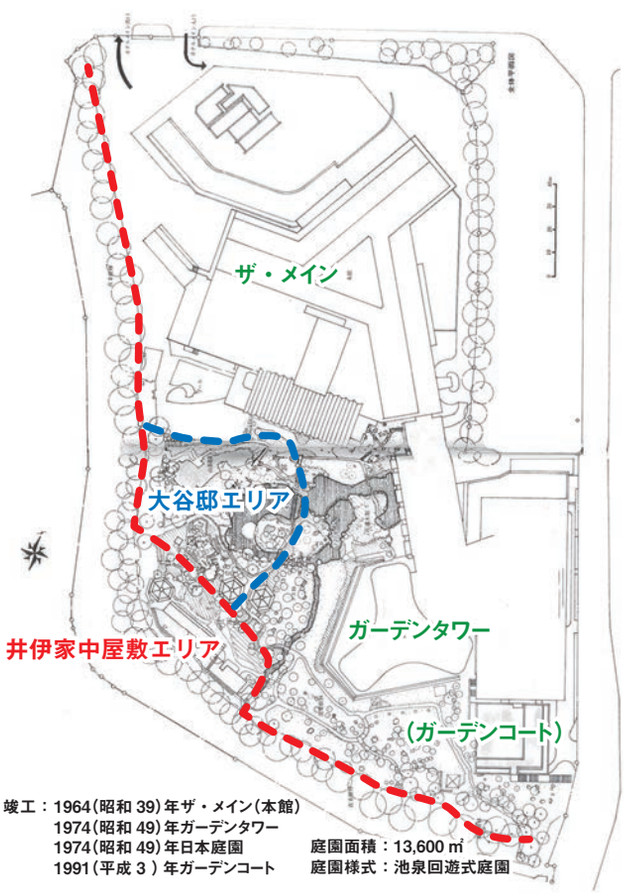


図1　庭園竣工時（1974年）の全体平面図　（筆者加筆）
（『日本の庭　岩城亘太郎作品集　現代編』、淡交社、1978）

大谷邸の庭には、もともと池がありました。現在は、その池の3分の2くらいが残っています。そこから東側、建物に近いところが、ホテルをつくったときに、新たにつくられた庭園です。

土地の変遷

私は、庭の設計をしておりますため、庭の地形とその土地の持つ記憶というか、時代性が非常に気になります。そこで、この土地の変遷を整理しました。

ホテルのある紀尾井町という地名は、江戸時代、紀伊徳川家、尾張徳川家、それから近江彦根藩の井伊家

の屋敷が並んでいたということで、この三家より一字ずつとって名付けられました。ホテルの敷地は井伊家中屋敷（図2）でした。現在の航空写真（図3）を見ると、道路の線形はほとんど変わっていないことがわかります。東側にある清水谷公園は、大久保利通暗殺の地として知られており、園内には哀悼の碑が建っています。ホテルの敷地を含めたその周辺は、江戸から明治への変遷を象徴する場所であり、都内としては貴重な場所と言えると思います。ちなみに、この場所は、井伊家中屋敷以前は加藤清正の下屋敷でした。

明治になって、井伊家の屋敷は伏見宮邸宅となりました。伏見宮邸は建物が45棟ありましたが、戦火でそのほぼすべてが焼けてしまいました。残ったのは庭だけでした（図4）。

大戦後、伏見宮家がここを手放すにあたり、大谷が買取り、自邸としました。その時は、シイ、クスノキなど大木が残っていたという話です。

1963（昭和38）年、ホテルの建設工事が始まった頃の航空写真（図5）には、大谷邸の自宅と池が見えます。現在の「山茶花荘」の建物です。

同じ航空写真の右下に弁慶橋が見えます。橋のすぐそばには大きな門があり、そこの左上に上がっていく道から庭の材料など大きなものを出し入れしていたそうです。

図3　現代のホテルニューオータニ
（国土地理院ウェブサイト）

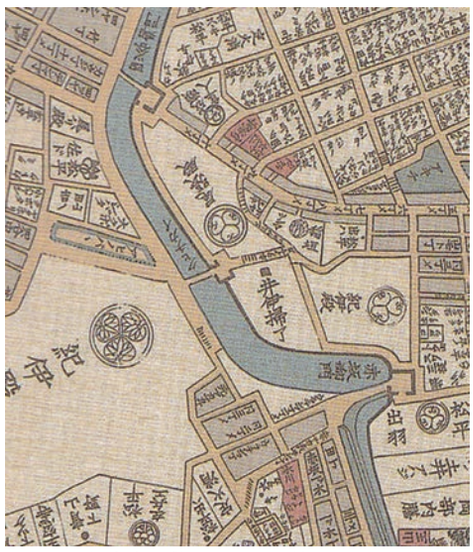


図2　井伊家中屋敷　御江戸大絵図
（天保14／1843年）部分
出典：『江戸東京散歩』人文社、2008

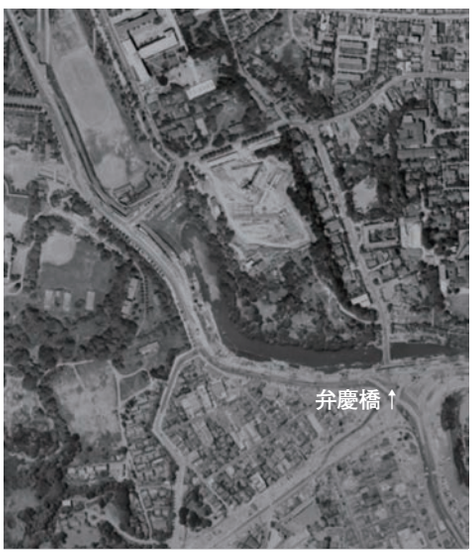


図5　ホテル建設期　（1963年）
（国土地理院ウェブサイト）

図4　伏見宮邸時代　（1947年）
（国土地理院ウェブサイト）

図6　大滝を上から望む（1986年竣工時）（株式会社岩城提供）

竣工当時の庭園

ホテルニューオータニの庭園の見どころを竣工当時の写真で紹介します。何といってもメインは大滝です。図6はガーデンラウンジから大滝を俯瞰した写真です。落ち口はS字のラインを描いており、幅17メートル、落差5・5mの大スケールの滝です。

手前のガーデンラウンジ前には小さな池があり、手水鉢から水が湧き出しています。滝の奥には朱塗りの橋、その奥には「山茶花荘」の屋根が見えています。さらにその先は空が見えるという近景、中景、遠景で構成したダイナミックな景色です。

図7　下から見上げた大滝（株式会社岩城提供）

一方、図7は下から見上げた大滝です。この視点で見えるのは、近代的なホテルの宴会棟や本館で、これらが滝の借景となっています。亘太郎は、こういう近代的なものも庭に取り入れて、伝統的なものに革新的なものをどうやって受容していくのかというところを非常に考えていたと思います。

龍居先生がお話されたように、いろいろな視点から見た庭を亘太郎はつくっていました。この庭園は多様な視点という点で代表的な例になるのではないかと思います。

図8　「山茶花荘」の庭（株式会社岩城提供）

竣工当初の「山茶花荘」の庭（図8）は、砂利敷きにマツというシンプルなつくりとなっています。部屋の中からは豊かな緑と水面が望めるので、あえてシンプルにつくられています。また、建物の外から見ると、建物が庭の景色になっています。日本庭園の中には建物も景観を構成する要素として重要です。庭に溶け込んだ非常にいい風情が出ていると思います。

図9は、現在ビオトープと呼ばれているところから撮ったものです。もともと芝生でしたが、樹木が大きくなり、現在はとても芝生が持つような感じではなく、かなり鬱蒼とした緑で背景の建物が見えない状態になっています。

図9　芝生とマツの庭園（株式会社岩城提供）

最後に、ホテルニューオータニの庭園のもう一つの特徴である赤玉石についてお話します（図10）。この赤玉石は亘太郎が入れたのではありません。大谷のコレクションとして集められたもので、大小含め、相当の数があります。当初はこの倍の数があったと聞いています。これだけの赤玉石を集めた庭は他に例はないと思います。

現地では、竣工当時と現在の様子を比べて観ていただけたらと思います。

図10　赤玉石の庭園（株式会社岩城提供）

ホテルニューオータニ庭園　現地見学会

見学ポイント（平面図は園内の案内板より）

⑤紅葉越しに望む「山茶花荘」

モミジ越しに「山茶花荘」がきれいに見えます。日本庭園には和風建築があると景色がしまり、風情が感じられます。

⑥ガーデンレストラン「石心亭」と「招月亭」

海外のリゾートホテルではよくみられるガーデンレストランです。庭の中で食事が楽しめるという贅沢なつくりで、ホテルニューオータニの革新的なところの一つです。日本ではここが先駆けでした。（2022.3.29 撮影）

③大名庭園の名残りの濡鷺型灯籠と景石

この辺りは大名庭園の頃の姿が残っています。景石は三波石が多く用いられ、真鶴石や赤玉石も見られます。このジャンボサイズの濡鷺型灯籠は大名庭園であった頃のものです。この他にも大きな灯籠が園内には数多く残っています。

④和楽庵（左）と石塔（右）

茶室「和楽庵」は日本橋の呉服屋「白木屋」（現・東急百貨店）にあったものを移築しました。数寄屋大工棟梁の３代目木村清兵衛によって建てられたものです。清兵衛は益田鈍翁の茶室も建てており、庭もつくっています。

この五重塔はかなり古いもので、鎌倉期か少し後の頃かと言われています。

①荒川淳良氏の案内で見学スタート

ここは、ザ・プールの横辺りです。ここに至るアプローチ西側の斜面地（写真・左）に生育するスダジイ、クスノキなどの大木は大名庭園の時代からあった樹木です。

②なだ万本店「山茶花荘」入口

入口部分の特徴は「木賊（とくさ）垣」です。竹を縦半分に割って並べた垣根できれいに合端を合わせてつくられています。下の腰張りは丹波石を使っています。丹波石は板状の薄い石ですが、ごつごつした面を表にして石積風にみせているのが岩城の仕事の特徴です。

⑫朱塗りの橋から流れる滝

上の池から流れる水は、まず左に、そして右に落ち、途中で二股に分かれ、一方が、まっすぐ落ち、もう片方が２段で落ちる姿は、教科書通りで、まさに絵に描いたような滝です。山梨県産の富士石で組まれています。

⑩シダレサクラ越しの沢渡り

この景色は「植治」の沢渡りの雰囲気に近いと思います。護岸の石の中には水孔石が用いられています。小穴が無数に空いた軽石で、苔が乗りやすく色も落ち着いているため、建物の屋上や狭い場所で使われるようになりました。水孔石を用いた初期の事例です。

⑪滝から流れるせせらぎ

緩やかな勾配、ゆっくりと蛇行する流れのつくりは「植治風」を感じます。流れ沿いの刈込は低く仕立てられ、非常に手入れが行き届いています。低い刈込も「植治」でよくみられる手法です。

⑦山茶花荘と庭とのつながり

「山茶花荘」を囲む白穂垣に向かう丹波石の延段。園内に廻らされた園路は様々な仕上げにより変化をつけ、散策の楽しさを演出しています。（荒川淳良氏提供）

⑧佐渡の赤玉石の枯山水

ここは、普通の枯山水庭園ではなく、赤玉石を展示するための庭といえます。

⑬本館の建物に負けないスケールの大滝

本館を借景としたスケールの大きな滝です。滝の形状を決めるにあたって、施主や大成建設と模型を作るなどして、本館建物の高さや、低いところに位置するタワーからの見え方を考慮し検討を重ねたそうです。一案として、自然風の滝もありましたが、結局、近代的な建物のスケールに合わせて、幅 17 m、落差 5.5 mのダイナミックな滝となりました。滝の水を落とすために出力 20kw のポンプ5台を据え、そのうち３台を常時稼働させています。当時はその出力のポンプはなかったので、設備業者が 20kw 相当に改造したそうです。このように布状に落とすためには、毎分 15 t の水量が必要です。池の水は通常循環していますが、満水時にはお堀にオーバーフローします。

⑨最大級の赤玉石

奥の石は、園内最大のもので、22 tあります。このような大きな石は珍しく貴重です。手前の石と比べて表面が滑らかなのは、毎日 20 人がかりで砥石を使って磨いていたからだそうです。

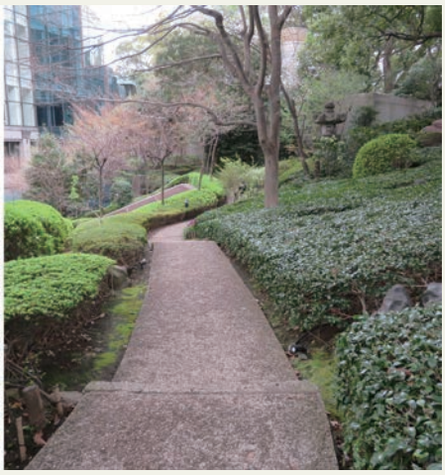
⑯イヌマキ（左）とカヤ（右）

天明年間（1780年代）にはあったといわれるイヌマキ。カヤも同年代の樹木といわれています。この辺りの植栽は大名庭園であった頃の名残です。

⑰茶室「和楽庵」庭門前の石橋

非常に丁寧なつくりの石橋です。そり橋で欄干が付いたものは、現在ではなかなか見られません。大名庭園の頃からあったものでしょう。

特記以外は見学時（2019.12.7）撮影



⑭滝周辺の景石と刈込（左）と園内の刈込（右）

大谷邸にはたくさん石があったそうで、滝組本体や両側の景石に多く使われています。

斜面の低い刈込は、「岩城」ではよく行う手法です。築山など地形をきれいに見せたい場合、京都ではコケを用いますが、東京ではコケの生育が期待できないので、カンツバキ、ヒサカキなどの刈込を用います。手入れとしては、ただ表面を刈込むのではなく、木鋏で中の枝を１本１本枝抜きして形を整えています。

⑮清泉亭の池

滝に見られる石組は、古い時代の手法で組まれています。この辺りが最も古い時代の庭園の名残がみられるところです。（2022.3.29撮影）

新役員紹介

新理事

北村（きたむら） 均（ひとし）

長野県上田市出身

東京都の文化財庭園の小石川後楽園、浜離宮恩賜庭園、旧古河庭園、清澄庭園の維持管理に30年関わりを持ってきました。

その間、龍居竹之介名誉会長はじめ常務理事の皆さん、会員の皆さんから多くの助言、指導をいただき、ここまで来れたと思っています。これからは、この経験を庭園協会の発展に寄与できる様に努力して参りたいと思います。よろしくお願いします。

（（公財）東京都公園協会）

曽根（そね） 将郎（まさお）

1976年生まれ

京都府京都市出身

大学時代より当会員として加えていただき、海外でのシンポジウム参加など多くのことを経験させていただきました。今後は心新たに会員の皆さまの声を聞き、共に日本庭園の研鑽をしていけるような会の運営に尽していきたいと考えています。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

（近畿支部・（株）曽根造園）

新評議員

伊久美（いくみ） 和秀（かずひで）

1978年生まれ

静岡県藤枝市出身

本部や他支部との連携や情報交換は、支部会員一人一人の技術、知識、活気の向上を目指している支部活動にとって大きな力となります。そのつなぎ役として静岡県からの情報発信に努めてまいります。コロナ禍が収まり、今年こそは、県外の会員の方々と直接交流ができる日常が戻りますことを願いつつ、新任のご挨拶とさせていただきます。

（静岡県支部長・伊久美造園）

伊東（いとう） 政信（まさのぶ）

1960年生まれ

東京都文京区出身

この度、100年以上の歴史ある日本庭園協会の評議員に選出いただき、身に余る光栄と感謝申し上げます。私自身は「庭園」については素人でありますが、学校では様々な授業を通じて有為な人材を送り出そうと日々努力しておりま

す。日本が世界に誇るべき日本庭園の文化を守り、継承し、普及しようとしている貴協会にとって、少しでもお役に立てるように精いっぱい努力してまいりますので何卒よろしくお願いいたします。

（テクノ・ホルティ園芸専門学校理事長）

内山（うちやま） 貞文（さだふみ）

1955年生まれ
福岡県久留米市
田主丸町出身

今年度、日本庭園協会の評議員に就任させていただくこととなりました。諸先輩やご経験をお持ちの他の評議員の皆様と協力し、責務を果たして参る所存です。何卒よろしくお願い申し上げます。

（ポートランド日本庭園チーフキュレーター）

北村（きたむら） 葉子（ようこ）

滋賀県出身

文化財庭園のお仕事に携わって13年がたちました。コロナ禍でお庭に訪れるお客様が、お庭に足を踏み入れた時にほっとされている表情がマスク越しにも見て取れます。アフターコロナにおいても、お庭の持つ力が、訪れる人の心を動かせればよいなと精進していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（（公財）東京都公園協会）

小林（こばやし） 裕子（ひろこ）

埼玉県狭山市出身

現在、埼玉県飯能市を拠点としてエクステリア&ガーデンの設計、施工をさせていただいております。樹木をはじめ、低木や草花が好きで植物の魅力が感じられる空間づくりを心掛けています。どうぞよろしくお願いいたします。

（アトリエナナ）

竹内（たけうち） 智子（ともこ）

東京都武蔵野市出身

2020年まで東京都に勤務し、都市計画の経験の他、設計・工事責任者として、小石川後楽園の唐門の復元や芝公園もみじ谷の再整備等に携わりました。庭園を都市の中で活かす「文化財庭園都市」を目指し、庭園と都市計画制度について研究をしています。微力ながら、都市の中で庭園を活かし、世界においても日本庭園のプレゼンスを高めるお手伝いができればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（千葉大学大学院 園芸学研究院）

米谷（まいたに） 進吾（しんご）

1960年生まれ
香川県観音寺市出身

昨年の春に新支部長を任されて以来、コロナウィルス蔓延の影響で行事が出来ていません。以後状況が好転することで、庭園協会に微力ですがお役にたてるよう、努めていきたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

（四国支部長・米谷造園）

役員一覧

☆印は新任 敬称略 五十音順

（任期：2022年3月11日～2024年3月10日）

名誉会長	龍居 竹之介			
顧問	金子 直作	中村 一		
会長	高橋康夫			
副会長	菊地正樹	内田 均		
常務理事	加藤 新一郎	加藤 精一	廣瀬慶寛	小沼 康子
理事	上野 周三	高橋 良仁	平井 孝幸	山田 拓広
	清水 哲也	北村 均 ☆	曽根 将郎 ☆	
評議員	厚澤 秋成	尼﨑 博正	粟野 隆	飯山 良子
	伊久美 和秀 ☆	石井 敬明	石亀 靖	石川 治壱
	磯 守	伊東 政信 ☆	岩﨑 隆	内山 貞文 ☆
	越智 將人	落合 悟	小野 登身	河西 力
	菊池 正芳	北村 葉子 ☆	木下 照信	髙良 啓子
	小杉 忠広	古平 貞夫	後藤 幸雄	小林 紀昭
	小林 裕子 ☆	坂本 利男	清水 一樹	菅沼 孝仁
	鈴木 貴博	鈴木 康幸	竹内 智子 ☆	高見 紀雄
	竹田 利光	田中 節照	田中 徳夫	殿井 正敏
	飛田 幸男	豊藏 均	仲佐 修二	中根 史郎
	中山 なつ希	野村 光宏	福田 芳野	藤原 忍
	星 宏海	本川 勇	米谷 進吾 ☆	水本 隆信
	三宅 秀俊	宮本 広之	村田 義雄	望月 敬士
	桃井 雅彦	山田 祐司	由比 誠一郎	横山 英悦
	米山 拓未			
監事	野村 脩	中村 寛	小泉 隆一	
名誉会員	青木 美樹子	石川 昇造	大平 暁	加藤 雍太郎
	庄司 ヨシ	内藤 操	前川 冨士子	藤枝 修子
	柴田 正文	福田 光子		

全国支部長連絡協議会報告

2022（令和4）年1月22日（土）

新潟県支部長　小林（こばやし）紀昭（のりあき）

今年度の全国支部長連絡協議会を新潟県支部が幹事となり、令和4年1月22日に開催しました。今回の会議はリモート形式で行い、17支部の支部長はじめ多くの方々に参加いただきました。本当にありがとうございました。

実は、会議の開催は2年前にも要請されたのですが、コロナ禍で集まることができず、まして新潟はこの時期雪に埋もれ、交通機関に影響が出やすく、何をするにも難しい時期でした。そこで本部でリモート会議の準備をすること及び会議と視察研修会を切り離して開催することをお願いして、1年おいて今回の開催になりました。

まず各支部報告では、チェーンブロック講習会、瓦土塀と腰積み講習会、編笠門作製講習会などや商業施設での坪庭の展示などの実施、さらにそれら活動内容のユーチューブや支部ホームページなどでの発信など、現在の情報ツールを活用したとの報告がありました。また、モルタル造形など新しい技術開発を計画している支部もあり、全体的に都市に近くて感染者が多い地域で活発な活動をしている支部が多いことに驚きました。社会経済を止めないでウィズコロナに向かうことが叫ばれている昨今、感染対策を行い実施している各支部に励まされ、元気をいただきました。

協議事項では、①造園業の若手従業員の確保、②作庭の現状と庭園のあり方、③樹木（苗木、草類、グランドカバープランツ）の確保の仕方などの提案が寄せられました。①若手従業員の確保については、就業規則の改善などいろいろな話がありましたが、全国的な問題であり、今後試行錯誤が必要だと感じました。②庭園のあり方については、個々の感性を突き詰めていくことが大切ではないかと言う意見がありました。③樹木の確保については、各支部との情報網を利用し開拓していくことが大切だと感じました。

最後に、会議の準備並びにご指導ご協力をいただきました関係者各位に対し、心より感謝申し上げます。この全国支部長連絡協議会での出会いや情報網こそが、一番大切なツールではないかと今回改めて感じました。

「くまもと花とみどりの博覧会」が開催中

「くまもと花とみどりの博覧会」は熊本県で2022（令和4）年3月19日から5月22日まで65日の期間で開催されています。

「森と水の都くまもとで花と生きる幸せをつむごう」をテーマに、「街なかエリア（熊本城公園及び花畑広場一帯）」、「水辺エリア（水前寺江津湖公園一帯）」、「まち山エリア（立田山）」の3会場で花とみどりのイベントが繰り広げられています。

「街なかエリア」の辛島公園では「鳥取県の庭」として石亀靖氏（鳥取県支部長）の作品が出展されています。

テーマ「ようこそ ようこそ 鳥取県へ」
サンド（鳥取砂丘／3度）でも何度でもまっとります。そして熊本地震から5年。哀悼の意・鎮魂を込めて　2022.3.15　石亀 靖氏撮影

日本唯一の鳥取城における「巻石垣」や美しい自然と歴史文化がちりばめられた展示作品を紹介します。

ご寄付ありがとうございました

日本庭園協会を温かく見守ってくださっている方からご寄付をいただきました。

匿名希望　10万円

心より感謝申し上げます。

新入会員・氏名（住所）

（2022（令和4）年1月1日から3月31日入会）

吉村 拓也（石川県）／坂口 和法（石川県）／髙橋 聡（石川県）

（入会順・敬称略）

編集後記

★巻頭言の写真、小田原フラワーガーデンの「渓流の梅園」は、約300品種500本のウメを有する関東最大級を誇る梅園です。その命名は榊原八朗氏によるとのことです。

★「現代日本庭園の巨匠たち・岩城亘太郎」の長尾欽弥本邸・別邸の庭園写真は、長尾資料館よりのご提供。館長加藤映様には感謝申し上げます。

★本号掲載の講演の文字起こしは鈴木貴博、酒井和佳子、原稿校閲は小沼康子、内田均が担当。

編集担当：小沼康子／内田 均／鈴木貴博／中山なつ希／酒井和佳子
本文デザイン：由比まゆみ